東南アジア研究　22巻1号　1984年6月

「ジャワ年代記」の時空性
——分裂王国マタラム宮廷作家の世界像——

宮　坂　正　昭*

Time and Space of the Javanese Chronicle *'Babad Tanah Jawi'* ——The *Pujanggas'* World View in the Divided Kingdom of Mataram——

Masaaki MIYASAKA*

The *'Babad Tanah Jawi'* was begun in the 17th century, but was largely written and compiled in the 18th century, when the Mataram Dynasty began to be enclosed and isolated by the V. O. C. (The Dutch East India Company). The content of the manuscripts remaining in the Yogyakarta and Surakarta courts is roughly divided between the main trends of the two courts.

This paper deals with *'Babad'* entries concerning the Hindu kingdom of Majapahit, Islam in the Pasisir district (Java's North Coast), and the V. O. C. at Batavia, in terms of their time sequence and the expansion or contraction of the space of the Mataram kingdom.

Under such serious circumstances as the political and economic isolation of the Mataram court by the Dutch, the authors of the *'Babad'*, the *pujanggas*, tried to escape from the outer world into the inner world of literature. They revived the glorious past of Majapahit in contemporaneous events, and they incorporated into the *'Babad'* foreign elements of Islam and the V. O. C., not as heterogeneous but as homogeneous elements, as, for example, in the episodes of the *'Wali Sanga'* (Nine Saints), or Jangkung in the Baron Sakender story. Throughout the chronicle, the *pujanggas* shift back and forth in time and space, like the native Goddess of the Southern Ocean, in order to assert or protect the true kingship of the Mataram rulers.

はじめに

ジャワには年代記の類，ことに babad と呼ばれる史書が数多く存在する。ここに選んだのは 'Babad Tanah Jawi' である。Babad は元来 mbabad「森を切り拓く」→「王宮を築く」→「王都・国造りのことを記す」，すなわち babad「歴史」を意味する。Tanah は「土地・国土」，Jawi は，高位，年長，未知の人への敬語 Kråmå で「ジャワ」の意。同等，下位，年下の者への言葉 Ngoko では Jåwå となる [Horne 1974]。つまり 'Babad Tanah Jawi' とは，「ジャワ国土の歴史」，この場合「Mataram（マタラム）王国の歴史」のことであるが，この名は総称と考えてよい。多分 *Babad Mataram*（『マタラム年代記』），*Babad Kraton*（『王宮年代記』），*Babad ing Nåtå Kinå-Kinå*（『古い王の年代記』），*Sajarah Råjå Jåwå*（『ジャワ王統

* 東京都立足立東高等学校; Adachi Higashi High School, 2-3-5 Oyada, Adachi-ku, Tokyo 120, Japan

記』）など，存在する稿本ごとに別々な名称があったと思われる [Ricklefs 1972；1976]。

インドネシア，マレーシアの島嶼部では，年代記・史書・史伝を表す言葉として，ジャワ語の babad のほか，sějarah, hikayat, tarikh, silsilah（フィリピン talsila），sěrat, surat などアラブ語に由来する語を用いている。

'Babad Tanah Jawi' の〈時空性〉とは，マタラム宮廷の年代記作家 pujangga たちがみた歴史や世界の有り様，そのコスモロジーをいう。以下，本稿では，「ジャワ年代記」を通してこの〈時空性〉を考察する。本稿の構成について略述すると，まず I では，史料典拠および時間の観念に触れ，II では，「年代記」世界の時間の連続性を Måjåpahit（マジャパヒト，ジャワ語モジョパヒト）王国の最後と結びつけて論じ，III では，イスラムが「年代記」に定置される状況を述べる。また IV では，マタラム王国の正史および正統性を保証する〈守護神〉を，V では，オランダが「年代記」に定置される状況を述べることにする。

I 「ジャワ年代記」の稿本と執筆時期

1. 数種の「年代記」と Meisma 版の欠陥

ジャワおよびバリに伝わる年代記の中でも，*Nāgarakĕrtāgama* や *Pararaton* が代表的であり，これに加えて 'Babad Tanah Jawi' も著名であり，その編纂自体が歴史を有している。

すなわち，「ジャワ年代記」にはさまざまな原稿・訳文が存在したから，その執筆時期も何回かあったと想定できるのである。マタラム王国は1757年まで続いたが，「年代記」には1743年までのできごとが記録された。各稿本に共通する主要部分は17世紀前半にはでき上がっていた。まず，この世のはじまりから1677年のマタラム王宮没落に至る個所は，1705年より少しのち，Pangeran Adi Langu 二世が執筆した。作者は同王宮没落までの話を，それ以前の Pajang 王宮没落までの話で代置したと思われる。次に，1677年から1718年までのカルタスラ期に関する個所は，Mangkurat 四世の治世（1719-1726）にスラバヤ出身の Carik Baj(a)ra, のちの Těměnggung Tirtåwignå が書いた。カルタスラ王宮は，マタラムが破壊した Pajang 王宮から遠からぬ地に建てられたマタラムの新王宮であった。Pajang 最後の支配者 A(di)wijåyå と，マタラムの Sunan Mangkurat 一世（Sunan Tĕgalwangi）の話とが重複する部分が多い。1677年 Mangkurat 二世が即位したが，作者は，同二世を継ぐのは息子の Sunan Mas（Mangkurat 三世）ではなく，Pangeran Pugĕr（Pakubuwånå 一世）であると主張した。さらに，1718年から43年までのカルタスラ期についても，恐らく Carik Bajra が，Pakubuwånå 三世の治世（1749-1792）の1757年よりのちに完成した。作者は，同三世の母親が出た Purbaya 家に格別な関心を払っていたとみられる。すなわち，1628-1629年，マタラムが2度バタビアを攻撃した際の Pangeran Purbaya の奇跡的行為や，Mangkurat 一世の治世中には大いに疑わしい政治的役割を演じていた彼が，1676年の Gĕgodog の戦いで，王の忠実な家臣として英雄的な最期を遂げたことが記されているのである [Djajadiningrat 1913：222-224；Graaf 1965：123, 129]。

これらがオランダ人編者によってオランダで公刊された経緯をみておこう。J.J. Meisma が1874年，Kĕrtapradja 版と Winter 版とを参照してまとめたジャワ語版は688ページからなり，これを W.L. Olthof がオランダ語に翻訳し1941年発行した。最も流布したのが Meisma のジャワ語版をローマ字綴りに改めたもので，やはり1941年オランダで出版され

ている。362ページからなるこの本は，*Poenika Serat Babad Tanah Djawi Wiwit Saking Nabi Adam Doemoegi Ing Taoen 1647* の題名をもち，筆者は同書をこの翻訳本のマレーシア語版 *Babad Tanah Jawa* とともにもっぱら使用した。だが，Meisma 版は重大な欠陥を有する要注意の書なのである[Graaf 1965 : 121 ; Ricklefs 1972 : 292]。それは，今後の「ジャワ年代記」研究では見逃すことができない新資料が発見されたことによる。これら新資料の状況を Ricklefs [1972; 1974] に基づいて略述すれば，次の通りである。一つは大英博物館追加稿本12320号 *Babad ing Kraton* (略称 *Babad Kraton*) で，「ジャワ年代記」の最古のテクストである。これは1777-1778年（ジャワ暦1703-1704年），ジョクジャカルタの宮廷で Sultan Mangkubumi, Amangkubuwånå 一世（在位1755-1792）の義理の息子 Raden Tĕmĕnggung Djajengrat が著した，1,400ページの大冊である。Adam（アダム）に始まる神話的な歴史から西暦1742年のカルタスラ没落までを扱っている。もう一つは18巻本からなるレイデン大学稿本1786号で，スラカルタ宮廷の「文芸復興期」[Pigeaud 1967-1970 : Vol. 1, 235] 1836年に完成した。同書は『大 Babad』と呼ばれ，1768年までを扱っている。同書のジャワ文字を，レイデン大学で助手を勤めた J. Soegiarto がローマ字綴りに直し，これを1939-1941年，インドネシアの Balai Pustaka 社がジャワ語で2,500ページに及ぶ31分冊の形で出版した。だが，この31分冊は，『大 Babad』が扱う1768年までではなく，1745-1746年までしか収めていない。1747-1768年までの個所はついに出版されなかった。『大 Babad』の1722年（ジャワ暦1647年）までを簡略に要約したものが Meisma 版であった [Ricklefs 1972: 292]。

上記2資料とも，内容的には全く同一ではなく，一方が他方からとり入れたのでもない。なぜならジョクジャ（カルタ）とスラカルタ（別名ソロ）の2王宮の関係は，文学上の共同研究を可能にする状況にはなかったからだ [*ibid.*: 290]。しかしながら両テクストとも，1755年にマタラム王国が2王宮に分裂する以前のカルタスラ宮廷に存在したと推定される「カルタスラ版テクスト」に基づいているのかもしれない。こうして，「ジャワ年代記」のさまざまな異本の内容は，両王宮の二つの流れに大別できる。

2. ジャワの暦——シャカ暦と Wuku 暦，暦法 (cåndrå sĕngkålå)

シャカ暦（陽暦）は，西暦78年3月14日にインドから帰国し，Mĕndang 国（現 Blora 市）を創設し，ジャワ語を発明したと伝えられる Aji Såkå（幼名 Tritustha/Tritresta, のち Kĕdiri の Jåyåbåyå 王）に因んだ名前である [Sri Jacat 1975]。アジ・サカ（ソコ）の名自体，「按司」（？）シャカ（釈迦）であろうから，シャカ暦はインドの暦を意味しよう。ジャワでは古期ジャワ語の時代から1633年まで使用された。バリ島では現在でも使用している。陽暦なので西暦から78年を引けばこの暦となる。また，シャカ暦（陰暦）と，1年が354-355日からなるイスラム教のヒジュラ暦（陰暦）とを組み合わせた「ジャワ暦」が，Sultan Agung によって1633年以降採用された [Ricklefs 1974 : 17; 1981a : 43]。[1] 西暦（陽暦）は西洋人の到来とともに知られたが，ジャワ暦が陰暦のため，西暦に合わせた Prånåtå Mångså 暦（農事暦）がソロの susuhunan によってはじめられ，1855年6月22日以降用いられている [*Primbon* 1979 : 10-11]。

Wuku 暦は，Aji Såkå 以前より用いられたジャワ最古の暦といわれる。*Pararaton* でも Ken Angrok は，文字の読み書き，文法

とともに，cåndrå sĕngkålå, Wuku 暦，月と時間の計算を修行僧から教わっている [*Pararaton* 1965 : 16]。Wuku のいわれは 'Babad' の冒頭，ジャワのはじまりの個所に述べられている [Meisma 版 1941 : 11; Ramlan 1975 : 4]。

Giling Wesi (「鉄の臼」) 国の Watu Gunung(「山の岩」)[2] 王には，Sinta 姫[3] と Landĕp 姫のふたりの妃がいた。王は Sinta 姫との間に27人の男児をもうけた。王が彼女の実子であることが判明した時，姫は夫を遠ざけ，天女と結婚するようにしむけた。天の Surålåyå 国は Batara Guru (ヒンドゥー＝ジャワの至高神)が治めていた。神は息子の Wisnu (Vishnu) に Watu Gunung を殺すよう命じた。夫を失った Sinta 姫の歎きの涙が洪水となってジャワ全土を覆ったため，Batara Guru も困りはて，Watu Gunung の死から数日後，彼を甦らせた（黄泉返り）。地上を好まず，妻や子供たちと天国に暮らすことを願った Watu Gunung は，毎週7日ごとにひとりを天国に呼び寄せることにした。こうして最初に Sinta 姫，次に Landĕp 姫，それから27週かかって27人の子が天に呼ばれた。

これが30週の名前のいわれとなった。30週210日で半 Wuku 年，420日で 1 Wuku 年である。[4]

Cåndrå sĕngkålå は，C.C. Berg 教授によれば Çakakāla（シャカ時代）に由来するから，シャカ暦とほぼ同一視できる [Berg 1965 : 89]。これは年号を意味すると同時に，起こったできごとの意味をも判じ物・暗号文のように秘めている独特な時の表し方である。

例えば，Dĕmak の Mĕsjid Agung 寺の建立について，蛇や亀，中央扉の雷の絵から〈ナーガ・サリラ・ワニ(naga salira wani)〉シャカ暦1388年を，人が通るまっすぐな扉〈コリ・トゥルス・グナニン・ジャンミ (kori trus gunaning janmi)〉はシャカ暦1399年を，〈ゲニ・マティ・スィニラム・ジャンミ (geni mati siniram janmi)〉（火は人に消されて死ぬ）は Dĕmak 国の成立を，それぞれ読み込んでいるという。また，イマームの場所にある陸亀の絵から，亀は頭が一つ，足4本，胴体は0，尻尾1で，シャカ暦1401年を得る。だから Agung 寺ができたのは，遅くとも西暦1479年ということになるという [Salam 1963 : 24-26, 33]。

Nāgarakĕrtāgama にも見出される sĕngkålå は，「年代記」の年代の骨組みとして用いられたのか，逆に，「年代記」の中の年号を抜き出してまとめたものなのかは未だ不明である。だが，事件の年号を記憶するこの方法は，年代記とも構造的に似ていることから，ジャワ人の思考における神話的な年代パターンを探るうえで重要な洞察を与えてくれるはずである [Ricklefs 1976 : 341]。

1) ただし，Pigeaud は新しい暦の採用を1625年のことだとしている [Pigeaud 1967-1970 : Vol. 1, 32, 157]。西暦1625年／1633年以前のできごとは，シャカ暦に78年を加えて西暦を求めうるが，その際注意すべきは，たとえ「年代記」に記された各事件が事実の何らかの「反映」であり，作者の「真実」を述べたものであるにせよ，事実そのものではないこと，従って，「年代記」中のシャカ暦を換算して得られた西暦の年号が「史実」か否かはことごとく疑ってみなければならないことである。この点で，歴史家が提示した年号とシャカ暦との差は常に78年ではなく，数年のズレが生じる場合がある。このズレをさらに埋めるためには，今後，各年代記の比較を通じ，ある事件に付したシャカ暦の象徴的な意味を解明し，他史料とつき合わせることによって暦の真偽を明確にすることが急務である。

2) *Pararaton* の最後のページに，wuku Watugunung の語がある [*Pararaton* 1965 : 59]。

3) *Rāmāyana* の Sita 姫。

4) 暦の上では Watu Gunung 王は，第1週目ではなく，第30週目に配置されている。

3.　世紀末転回期の不安と期待——「歴史は繰り返す」

ジャワ暦1600-1700年のころ，つまり西暦1677-1774年の時代は，'Babad' を書くうえで，pujangga たちや宮廷の人々が，まだ記憶に鮮やかなことがらを記録していた時期である。ジャワ暦1600年，マタラムの王都 Plered が，Trunåjåyå の率いるマドゥラ人たちによって陥落し，1603年カルタスラ朝が創設された。どちらも実際にあった事件であるが，二つのできごとの100年，200年前，あるいは100年，200年後をみるという見方が生じていた。すなわち，'00年にはそれまで存続した王朝が滅び，'03年に新王朝が興るという世紀末・終末思想と，英雄・救世主待望論である。1600-1603年と，1500-1503年および1400-1403年とをダブらせて過去をみ，1700-1703年の現在と，1800-1803年の未来を予想するのである [Ricklefs 1974: 11, n. 41; 1981a: 97; 1981b: 504]。かくして，*Babad Kraton* や sěngkålå のリストによれば，ジャワ暦1200年に Pajajaran（パジャジャラン）王国が興り，1300年に滅んだ。そして1301年にはマジャパヒトが興って，1400年に滅んだ。1400年に Děmak が興り，1500年に滅ぶ。Pajang の興ったのは1503年だという。各事件が史実通りかは疑わしいが，これらが世紀循環思想のモデルとなった [Ricklefs 1974: Chap. 7; 1981a: 97]。

18世紀にはマタラム王国の分割が永久的なものとなる気配があったので，世紀末の王権の正統性に対する危機が再び近づいた。ジャワ暦1700年は1774年3月にはじまり，1王宮が滅ぶことが予想されたため，分裂したジョクジャとソロの両宮廷は1771-1774年に土地や領民のとり決めを結び，共存関係を保つことによって危機を回避した [Ricklefs 1981a: 98; 1981b: 503-504]。

ジャワ暦1700年，ジョクジャの皇太子，のちの Amangkubuwånå 二世は，*Sěrat Surya Raja*（『王たちの太陽の書』）を著した。1703年（1777年），ジョクジャで *Babad Kraton* が書かれた。1700年には何の王朝も滅びず，1703年には何も創設されなかった。理論の方ができごとに先行した結果，事件を未然に防ぐ措置として，上記の2書が執筆されたのだと考えられる [Ricklefs 1974: Chap. 7; 1981a: 97-98; 1981b: 505]。

II　ヒンドゥー王国マジャパヒト——「現在する」過去の時空

1.　王国創設者 Raden Susuruh

Raden Susuruh（ススル殿下）はパジャジャラン王の息子であった。父王が殺したアジャル[5]・チュパカ[6]という修行僧の子アルヤ・バニャッ・ウィデ（幼名スィユン・ワナラ）に父を殺され，国を追われた。一行が辿りついたコンバン[7]山には，チュマラ[8]の樹の下で苦行を続ける老修行僧アジャル・チュマラ・トゥンガル[9]がいた。実はこの人物は，ススル王子の祖母の妹で，結婚を嫌って山にこもっていたのである。老人にも，美しい娘にも変身できる術を心得る両性具有の修験者は，王子に，「東に進み，苦いマジャの樹が生える地に国を拓け」と進言し，「汝がジャワ全土を支配する王となったら会おう。私は全霊を連れて海に移り，王となった者と結婚し，Pamantingan の北方と Měrapi 山の南方を統治する子孫を残す。汝が困難に直面したなら，霊たちが助けてくれるであろう」

5) Ajar は阿闍梨であり，学者・名僧をいうが，修行僧・修験者の場合が多い。
6) Cěpaka はくちなしの木。
7) Kombang は丸花蜂。死霊がとりつく [Knappert 1977]。
8) Cěmara は木麻黄の樹。
9) Tunggal は「唯一(の)」の意。

と予言した。予言通り東の Singåsåri 王国を目指したススル王子一行は，途中１本のマジャの樹の下で止まった。一つしかない実を食べると苦い (pahit) 味がした。彼らはここに居を定め，Måjåpahit 村と命名した。のちには国となり，大いに繁栄した [Meisma 版 1941 : 15-17 ; Ramlan 1975 : 8-9]。

別の史書 *Pararaton* [1965 : 42-44] には次のように記されている。

マドゥラ島に逃れた Singåsåri 王国の Raden Wijåyå は，同島の代官バニャッ・ウィデ（称号アルヤ・ウィララージャ）の助言に従って，Trik の森を切り拓いて (mbabad) いた時，腹を空かしたひとりがマジャの実をかじったところ，非常に苦かった。それ以来，その地は Måjåpahit 村として知られるようになった。

上述のように，東のマジャパヒト建国と西のパジャジャラン王国は，深く結びついている。Pajajaran とは，Pe＋ajar-ajar＋an（阿闍梨・修験者たちの場）であろうし，Para＋hyang＋an（神・霊たちの座）もしくは Pa＋rahyang＋an（聖者・隠者の庵）こと Priangan（プリアンガン）ともつながっていよう [Ricklefs 1974 : 375, n. 32, 33]。さらに，海に渡り，Měrapi 山の南で全霊を従え，王と結婚する修行僧（かつてのパジャジャラン王女）こそ，南海の女神である [*ibid.*: 403, n. 87]。Pamantingan（＝マタラム）の北を統治する子孫たちとは，のちにジャワ海沿岸一帯にイスラムを布教した Wali Sångå（「９聖者」）たちを指すのであろう。

2. 最後の Bråwijåyå 王

Bråwijåyå（ブラウィジャヤ）王には，チャンパ（占城）から迎えた正妻，マジャパヒトの森に住んでいた怪女エンダン・サスミタプーラという妾，支那の姫がいた。妾との間の子ディラーは，のちにスマトラのパレンバン王となり，アルヤ・ダマルと名乗った。支那の姫は妊娠したまま，宰相 Gajah Mada（ガジャ・マダ）につき添われ，アルヤ・ダマルのもとに贈られた。姫が生んだ王との間の子が Raden Patah, 姫とアルヤ・ダマルとの間の子が Raden Husen である。ふたりは異父兄弟であり，アルヤ・ダマルと Raden Patah は異母兄弟となる。また，王が性病 (raja-singa) にかかった時，天の声があり，声の通りに，昔，正妻がチャンパから連れてきた黄色い Wandan の女と交わると病気は回復した。この女が生んだ子は８歳になったら殺すよう王に命じられていたが，召使いのひとりは Raden Bondan Kějawan（Kějawen とも綴り，「ジャワ核心域」の意）と名づけ，秘かに育てた [Meisma 版 1941 : 19-24; Ramlan 1975 : 13-15]。

燃える子宮をもつ Wandan の女こそは，*Pararaton* の Ken Dedes の再来であり，燃える子宮の女と交わった者は王にもなりうる [1965 : 25]。のちに Senåpati（セノパティ）と交わる南海の女王も，同じ役割を演じている [Meisma 版 1941 : 77-79 ; Ramlan 1975 : 56-58]。

マジャパヒトの最後が到来した。王が星占い師に自分の亡きあとの王国の運命を尋ねると，王の血筋を引く者は現れても，王国はマタラムに移るとの回答であった。やがて，Bintårå Děmak の Adipati (Raden Patah) が北部沿岸 (Pasisir) の全イスラム教徒軍を率いて，異教の父王のマジャパヒトに進軍し，王宮に踏み込んだ。マジャパヒト軍にはなす術もなく，王は忠実なガジャ・マダ宰相[10]たちとともに塔に登り，消

10) ガジャ・マダは，「年代記」中ではマジャパヒト滅亡まで存命していたとされる。

えてなくなった。王が亡くなる時，硬木のような一条の光が大音響とともに王宮から飛び出し，Dĕmak に落ちた [Meisma 版 1941：29-30；Ramlan 1975：20]。

王たちの昇天 (merad) は，「王殺し」のカモフラージュかもしれないが，マジャパヒトの単なる敗北ではなく，ヒンドゥー教を奉じた王の不死の象徴とも考えられる。[11]

欧米の歴史家や「ジャワ年代記」研究者は，マジャパヒト朝没落をジャワ史の断絶・分水嶺とみている。だが，ジョクジャの *Babad Kraton* やソロの『大 Babad』の作者 pujangga たちは，マジャパヒトの没落はイスラムの興隆にあるのではなく，むしろ新興イスラム諸国へと連続的に結びついているとみている。つまり，ジャワのイスラム化にとっては，マジャパヒトの滅亡が不可欠の要素であったとは考えないのである。なぜなら両テクストとも，ブラウィジャヤ王は息子の Bintårå の Adipati (Raden Patah) の新宗教に反対しなかったどころか，息子のイスラム改宗を願ったことを示唆している。また，Meisma 版とは異なるが，*Babad Kraton* では，Raden Patah はいく分無分別な，運命に翻弄される狂信的な信者だと描かれるのに対し，弟である Tĕrung の Adipati (Raden Husen) の方が同情的に描かれている。つまり，宗教としてのヒンドゥー教かイスラム教かではなく，父親を選ぶか兄を選ぶべきかという個人の忠孝に関わるジレンマを抱えて悩むのである [Ricklefs 1972：291-296]。

ジョクジャやソロの支配者たちは，自らをマジャパヒト時代およびそれ以前の時代にまでさかのぼる伝統の継承者だとみなし，先祖をブラウィジャヤ王に跡づける。だがその際，王とつなげるのに，Bintårå (のち Dĕmak) の Adipati たる Raden Patah を通じてではなく，Wandan の女との間の息子 Raden Bondan Kĕjawan を通じて結びつけたのである [Djajadiningrat 1913：4]。繰り返しになるが，マジャパヒトの没落とイスラム導入とは，pujangga やジャワ宮廷人の目には，人間の愛情の絆を越えて運命づけられ，予言された，王朝にとって必要なできごとだと映ったのである。それ故，二つの事件は，ジャワ史のパターンにおける決定的な断絶ではなく，むしろパターンに不可避の要素であった。宮廷人たちにとり，過去は無に帰するものではなく，「現在し」続け，舞台裏で待機している時空にほかならないのである [真木 1981：16-20]。

III　イスラム——時間の定置

ジャワ海沿岸地域 (Pasisir) と9聖者

ジャワのイスラム化に尽力した伝道師たちは後世，聖者 (Ar. Wali, Jw. Sunan) として尊敬されたが，ことに，伝説と史実の間にあってWali Sångå と呼ばれた9聖者が有名である。彼らの多くは死後，埋葬された土地に因んで「Sunan＋地名」で称号されている。Sunan は，susuhunan の略称である。ただし，何人もの Wali たちのうち，誰がその9人であるか確定は難しく，生存年代も不明であるといった方が正確である。Meisma 版ではマジャパヒトの最後の時期に，西方（マレー語では「風上の国」）から Makhdum Brahim Asmara (Maulana Malik Ibrahim か) がチャンパに至り，ここから息子の Raden Rahmat (のちの Sunan Ngampel/Ampel) と Raden Santri の兄弟がジャワに渡ったこと，Juldah の国から来た Syekh (Seh) Wali Lanang は，ジャワ東端の Blambangan の

11) *Pararaton* でも，Singåsåri 王 Ken Angrok に滅ぼされた Daha 国の Dangdang Gendis 王は，3人の妹たちとともに空に消えた [1965：31]。*Sajarah Bantĕn* ではパジャジャランのシリワンギ王が，ルダマラ姫とともに昇天した [Djajadiningrat 1913：285]。

姫との間に Sunan Giri をもうけたこと，Sunan Ampel の子 Sunan Bonang と Sunan Giri は，マラッカにいた Syekh (Sunan) Wali Lanang (*Sějarah Mělayu* 中の Tun Sri Lanang か) のもとで学んだこと，西方の国からは托鉢僧 Syek Rahidin が Ampel Děnta に来ていたこと，などが述べられている [Meisma 版 1941：18-21；Ramlan 1975：12-13]。

Sunan Ampel の孫娘と結婚した Raden Patah は，Bintårå の森を拓き，そこにムスジッド（モスク）を建立した。やがて，ここがジャワ最初のイスラム教中心地 Děmak 国になり，彼は 'Sultan' を名乗り，Senåpati Jimbun Ngabudurahman Paněmbahan Palembang Sayidin Pånåtågåmå と称した [Meisma 版 1941：24；Ramlan 1975：20]。

歴史上，sultan の称号は，のちのマタラム第3代の王 Sultan Agung 以降に使用されたことになっている。それ以前には，raja や pangeran（神，領主，王子），paněmbahan（尊崇された人物<sěmbah「敬う」），susuhunan（尊敬された人物<suhun「尊敬する」），または sunan（聖者）を代りに用いるのがふつうであった。'Babad' は，Děmak ののちの Pajang の支配者も sultan を名乗ったことを記しているが，このことから逆に，'Babad' の執筆時期が推定できる。すなわち，'Babad Tanah Jawi' の最初の草稿は，マタラム王国の版図が最大の時期，Sultan Agung が sultan の称号を有した最後の数年間(1641-1646年）に書かれたものと想定できるのである [Ricklefs 1974：17；1981a：40]。

Meisma 版には，上述のごとく，外国人の血筋を継ぐ Sunan たちが何人か登場した。だが，'Babad' 中で傑出して描かれるのは，生粋のジャワ人といわれる Sunan Kalijågå（幼名 Jåkå Sahid）である [Meisma 版 1941：21-22；Ramlan 1975：13]。

Sunan Kalijågå は，マジャパヒト朝の高官を父にもち，姉は Sunan Ampel の妻であった。若いころは賭けごとに凝り，Jěpara まで出掛けたことがあり，Lasem の北東の森で追いはぎまでやっていた。ここを通りかかった Sunan Bonang が4人に変身できる術をみせたのちは，足を洗った。Carebon (Cirěbon) の川岸（kalijaga「川守り」の名はここに由来する）などで数年に及ぶ修業を終えたのち，その地を治める Sunan Gunungjati（「チークの山」）の妹と結婚した。

彼が Děmak のムスジッド建立に関わったエピソードがある [Meisma 版 1941：30-31；Ramlan 1975：21]。

ムスジッド建立はシャカ暦1428年11月1日である。その前々日，彼が建材を集めて一つに縛っておいたら，翌日に柱となり，1日には完成したという。導師は Sunan Kudus，祈りの方角はメッカのカアバ神殿である。寺院建立から1週間後，Wali たちが読経のさ中に包みが落ちてきた。羊皮の包みの中には，莫蓙（ござ）と予言者ムハンマドの肩掛けが入っていた。Sunan Bonang の案で包みは Kalijågå が所有することになった。彼が羊の毛皮で作った上着は（これより前のエピソードに登場する天女の羽衣と同名の）Åntåkusumå もしくは「キヤイ・グンディル」と呼ばれ，王が即位の際に着用することとなったが，Děmak と Pajang の両王はそれを拒んだ。[12] のちに，上着は彼からセノパティに譲り渡された。

聖者たちの大立者である彼には，そのほか，信仰告白（カリモソド<kalimat syaha-

12) 両王が拒否した理由は，この上着を着ることを義務づけられたのは，ヒンドゥー教の，もしくはイスラム神秘主義 Sūfism の色濃いマタラムの王たちであると知ったためであろうか。

dat) の話，バティック布地の模様や歌詞の創作，ワヤンの利用など，およそ「ジャワ的」なる多くの物との関連がいい立てられている [Salam 1963; Geertz 1968]。

Babad Kraton 中には，上述した Meisma 版の聖者以外に，Sunan Muryå, Sunan Siti Jĕnar (Lĕmah Abang), Sunan Bayat の名も記されている [Ricklefs 1974: 4, n. 12; 1981b: 9]。

内陸マタラムの宗教が思索中心で「神人一如」を説く神秘主義的傾向を帯び，Pasisir のイスラムが正統的な遵法主義の堡塁を築いていくにつれて，内陸と沿海地域の間の反目が広がった。それ故，「9聖者」説話は，Pasisir が同じジャワ語を話す，ジャワ人の領域であるという意識から，および，マタラム王国がアンチ・イスラムではないことを証明する理由から，「年代記」に挿入したのだと思われる。

ここで一言すべきことは，少なくとも Meisma 版には 'Wali Sångå' なる語は見出されない点である。にもかかわらず，「9（もしくは8）聖者」という場合の8なり9の数は，Pasisir の人々やマタラム宮廷人にとっては世界や社会全体を象徴する聖数として知られたはずである [Djajadiningrat 1913: 103; Pigeaud 1967-1970: Vol. 1, 150]。「8にして9」を図示すると，方形の地に中央と八方位とを結べば，外周との交点は8，それに中心点を加えれば，9（⊠）になる。結び方によってはマンジの形（卐）にもなる。また，マタラム朝の上部組織から下部組織にわたって広く存在したといわれる måncåpat（「外部の四つ」）観念に従えば，中央の村を囲む，東西南北四つの村，さらにその外側の四つの村を加えれば9村となる。円で描けば，最初の小円には中心点，その周りの同心円に四つの点，次の円にも四つの点を書き入れる（⊛）。こうして，9人の聖者の配置図はさながら曼荼羅であり [馬淵 1976: 455-462]，その中心に来るのが Sunan Kalijågå であろう。

IV　マタラム王国——正統の系譜

1.　創設者セノパティと3代 Sultan Agung

Senåpati は「大将軍」を意味するが，マタラム王国初代の王の固有名詞として用いられている。Dĕmak 王になった Raden Patah がセノパティの称号を有した最初の王として描かれた。オランダ史料で明確に登場するのは「偉大なスルタン」を意味する3代目の Sultan Agung 以降であるから，初代の王は極めて謎多き人物であり，その命名法も，日本神話の「神武」や「崇神」の名称のつけ方と似通う点がある。セノパティが実在したか否かで，C.C. Berg 教授と de Graaf 博士との間に論争があった。[13] 'Babad' では，セノパティが王となる経緯が次のように描かれる [Meisma 版 1941: 65-76; Ramlan 1975: 48-55]。

Ki Agĕng Mataram（「マタラムの太公」）と呼ばれた Ki Agĕng Pĕmanahan は，森であったマタラムを建国し，Nyai Agĕng Sabah の長女で Kyai Agĕng Jurumartani の姉と結婚し，Ngabei Loring Pasar 殿下（のちのセノパティ）をもうけた。ある

13) Berg 教授は，「セノパティは実在せず，彼の特徴といわれるものはすべて Sultan Agung の特徴であり，Sultan Agung に系譜を与えることを意図した後世の創作である。セノパティの父親が死に，彼が王座についたとされるシャカ暦1535年（1613年）は，実は Sultan Agung の即位の年号である。故にセノパティの挿話は，Agung の話に古い日付をつけたものだ」とする。De Graaf 博士は，マタラムは Agung が支配者となる20年前から主要な政治勢力であったから，セノパティが全くのちの王朝神話作りの産物だとはありえない，と反論する [Ricklefs 1974: 12]。

時，喉の乾いた太公が，友人の家で，知らずに声を発する熟れていない椰子の実の汁を飲んだことから，息子がジャワの王となることが運命づけられた。また，セノパティの叔父 Ki Jurumartani は，Lipura の地で寝ていたセノパティの頭近くに空から星が落ちたのをみた。人間のように喋る星はセノパティに，「天命は下った。汝から汝の孫まで比類なき王となろう。だが，曾孫が最後の王となるころ，マタラム国内は混乱し，日月は隠れ，彗星が毎晩現れ，山は裂け，地震が起こり，灰の雨が降って国は滅びるであろう」と伝えたあと消えてしまった。

Dĕmak の最後には，Mĕrapi 山や Kidul 山が爆発して灰の雨が降り，陸には川の泥や岩石が襲ったと 'Babad' は述べ，マタラムの最後の姿を暗示する。

予言された国の最後に至るまでマタラムを守るのは「南海の女神」Nyai（「女」）・Råråå（「姫」）・Kidul（「南」）である [Meisma 版 1941：77-79；Ramlan 1975：56-58]。

セノパティは三日三晩，南海の海底にある女神の宮殿で楽しく過ごし，女神から国を統治する方法も学んだ。彼自身にも神通力があり，濡れずに海面を歩いたり，海水を熱くして魚たちを煮たり，生き返らせたりできた。

さらに彼には，彼にしかみえない守護霊 Juru Taman（「庭師」）がつき従っている [Meisma 版 1941: 89-90; Ramlan 1975: 65]。

Pajang の王が，セノパティ軍の反撃を受けて敗走中，乗物から落ちたのがもとで病になった。Juru Taman が王の胸に入り込むと，やがて王は息を引きとった。

これは毒殺の別な表現であろうか。変幻自在な Juru Taman は，単なる「庭師，園丁」なのではなく，「庭番，隠密，影忍」としての役割を担っていると考えられる。

セノパティはマタラム最初の支配者（称号 Senåpati ing Ngalaga Sayidin Pånåtå-gåmå）として王国の基礎を作ったと思われるが，その治世は一連の戦闘，それも大部分が Pasisir に対する戦いだったと記されている。中でもスラバヤが最大の敵であり，息子の代でも制圧できず，1620-1625年，孫の Agung の代にスラバヤを攻略した。セノパティは1601年に死んだとされ，子供は9人あった。

最初の子は，彼と，殺された夫の復讐をはたすまで山中に裸でこもったカリニャマット妃が彼に贈った女性との間にできた Rangga 殿下であり，sekti（霊力）を有する者として知られたが，大蛇退治ののち亡くなった。2番目が Pugĕr 王子，第3子が Purbaya 王子，第4子 Jåyåråga 王子，5子 Juminah 王子，6番目が第2代の支配者となった Panĕmbahan Seda ing Krapyak（幼名 Si Jolang），7番目 Pringgalaya 王子，8，9番目は王女であった [Meisma 版 1941：97-98；Ramlan 1975：70-71]。

セノパティが Pajang の王家から譲り受けた3種の家宝であるゴング（Kyai Sĕkar Dĕlima）・馬の手綱（Kyai Macan Guguh）・馬の鞍（Kyai Gatayu）そのほかは，彼の死後もマタラム王家の遺産として伝えられた。また，叔父 Jurumartani がかつて彼に，「王・父・師に刃むかってはならぬ」と諭した戒めを守り，王となった彼は三つの相談役を大事にした。国を治めるうえで困難に遭遇した時の伝道者（pandita），未来を知る際の星占い師（ahli nujum），霊力・超自然力（kasekten）を望む場合の修験者（ahli tapa）たちである [Meisma 版 1941：72, 96；Ramlan 1975：53, 69]。

2代目の Krapyak は，建造物を数多く残したという。8-9世紀に建立された寺院に

囲まれた Kuta Gĕde の塀を建ててもいる。文学を奨励し，1612年（ヒジュラ暦1534年），Dĕmak の歴史を書くように命じたと，19世紀の sĕngkålå リストが述べているという [Ricklefs 1974: 14]。

Raden Mas Martapura がほんの一時期王位についたのち，1613年，Mas Rangsang が第3代目の（'Babad' では4人目の）マタラム王となった。称号は Kangjĕng Sultan Agung Senåpati ing Ngalaga Ngabdurrahman および Kangjeng Sultan Agung Prabu Panditå Anyakråkusumå である。彼は1628年と29年の2度 Bĕtawi（バタビア）城にマタラムの大軍を送ったが，オランダ軍（Welandi）に撃退された [Meisma 版 1941: 139; Ramlan 1975: 93]。

この戦いが続いていたころ，オランダ軍は弾薬が尽きたようすで，ついに砲弾の代りに糞尿を用いるに至った。マタラム軍は目が眩み，排泄物の臭気に我慢できなかった。突然，Sultan の使者が来て，軍が国に戻るように伝えたため，マタラム軍は総退却した。

永積教授は，「この当時細菌弾などあるはずがなく，これはコレラの流行についてのすこぶる幻想的な解釈なのである」と述べている [永積 1977: 180]。

2. Pangeran Pugĕr——王弟の王位継承

'Babad' によればジャワ暦1578年に Sultan Agung が亡くなったが，遺言に従って跡を継いだのが長男の Pangeran Adipati Arya Mataram であり，Kangjeng Susuhunan Mangkurat Senåpati ing Ngalaga Abdurrahman Sayidin Pånåtågåmå と称した。史書では Sultan の死は西暦1646年のこととされるから，ジャワ暦では1568年ごろでないと10年近い誤差が生じることになる（例えば Ricklefs [1981a: 44]）。この Mangkurat 一世の治世は1677年（ジャワ暦1600年）まで続き，マタラムの王宮は Kutakartå から Plered に移った。王には5人の王子があった。スラバヤの姫との間に生まれた長子以外は，別な女性との間の子，つまり Pugĕr 王子，Singåsåri 王子，Mĕrtåsånå 王子，Muståpå 王子である [Meisma 版 1941: 141, 147; Ramlan 1975: 95, 98]。

この王は非道の王として伝えられている。そして，王国に災禍が襲う有り様と遷都の状況については，次のように描かれている [Meisma 版 1941: 154-174; Ramlan 1975: 102-112]。

日蝕・月蝕がしばしば起こり，乾期にも雨が降り，灰の雨さえ降って地震もあった。毎晩，彗星が現れた。すべての現象が，マタラム国がやがて滅亡することを物語っていた。王には，自分の治世中，マタラムが建国100年を迎える時，国が滅ぶことが分かっていた。そこで，ジャワ暦1600年（西暦1677年）2月18日，王は王族たちとともに Plered の王宮を離れ，Imågiri の墓で祈りを捧げたのち，西にむかった。

もぬけの殻となった王宮を襲ったのが，Trunåjåyå の率いるマドゥラとマカッサルの軍である。[14] 叛徒 Trunåjåyå は，王宮に残っていた王のふたりの妹のひとりを妻とした。逃亡中の王は病気になり，枕もとに皇太子を呼んだ。王は，アッラーの神の思召しにより，ジャワには大きな変化が起こること，敵軍に復讐するにはオランダ東インド会社に援助を求めること，オランダを味方にすれば孫の代には勝利を収めること，短剣「キヤイ・バラバール」と槍「キヤイ・バル」を形見に譲ること，自分の死体は，芳香の漂う Tĕgal の高い土地に埋

14) 恐らく事実は逆で，敵軍が王宮を奪ったので，王族は脱出したのであろう。

葬すること，を遺言に残し他界した(Sunan Tĕgalwangi とも呼ばれる)。

皇太子は父の死を歎き，マタラムの滅亡が神の意思である以上，自分の望みは王になることではなく，1隻の船を造ってメッカに巡礼する以外にはないと思い込んでいた。だがある晩，Banyumas のモスクで寝ている時，夢をみた。屋根の穴を通して空から七つの月がまっすぐ胸に入り，胸から太陽のように輝く，短剣の柄ほどの子供が現れた。捕えようとしても無理なので，再び胸の中に入ってもらった。「Nurbuat の光」で満たされた時，彼は王になろうと決心した。Susuhunan Mangkurat Senåpati ing Ngalaga Abdurrahman Sayidin Pånåtågåmå，通称 Mangkurat 二世（1677-1703）の即位である。

先に，父王より家宝の中の短剣「マヘサ・ヌラール」と槍「キヤイ・プレレド」を譲り受け，マタラムをとり戻すことを託されていた皇太子の異母弟 Pugĕr 王子(Pangeran Pugĕr) も，Jĕnar で夢をみた。父が現れ，Jĕnar で王となったらマタラムの国をとり戻せ，と伝えたのち，世を去った。Pugĕr は，夢枕に立った父の言葉を側近に話し，即位した。Jĕnar を Purwåkåndå と改め，Kangjeng Susuhunan Ngalaga Abdurrahman Sayidin Pånåtågåmå と称した。父王の象に乗って全軍を率い，反乱軍を撃退して Plered の都を奪い返した。マタラムに再び平和が訪れたのも束の間，日照りによる作物の不作に加え，疫病による高熱で多くの人たちが亡くなった。Pangeran Pugĕr がカルタスラの王宮で，正式にマタラムの王として即位したのはジャワ暦1629年（1704年）のことであり，即位は Bĕtawi の総督の許可を得たうえで行われた。称号は，先の称号 Kangjeng Susuhunan のあとに Pakubuwånå Senåpati ing を加えたものであり，通称 Pakubuwånå 一世（1704-1719）と呼ばれる。

彼や，彼以後に登場する王たちの称号には，アラブ名に加えてサンスクリット語に由来する名を用いているものがある。Pakubuwånå, Pakualam は「宇宙・世界の釘(軸)」を意味し，(H)amĕngkubuwånå, Amangkubumi は「大地を統べる者」の意である。神々の大宇宙と人間たちの小宇宙を，間に立った王が結びつけ，王を中心にして王宮(Kraton) さらに王都 (kutagara) があり，直轄領 (nĕgårå agung) と直轄領以外の外領(måncå negårå) もしくは Pasisir がとり巻き，海外 (Tanah Sabrang) が広がる[Moertono 1968：112]。このようなジャワの王国の空間構造を，神々の天界・冥界，妖怪や魑魅魍魎や霊たちがうごめく地界からなる「聖なる」空間もしくは霊界が覆っている。霊界を統治できる能力のある者こそが，真の聖者・王者なのであった。その霊なる力 (kasekten) は，修業 (tåpå)，遍歴 (sĕmadi)，秘義 (ngelmu) を通して伝授されるのみならず，天の啓示，夢のお告げなどで運命づけられるものでもあった [*ibid.*: 45, 56]。

3. 守護霊——空間を占める神秘なるものたち

始祖アダム

「これは予言者アダム以降のジャワ諸王の歴史である」と 'Babad' は書き出し，アダム—スィス—ヌルチャハヤ—ヌルアサ—サンヒャン・ウェニン—サンヒャン・トゥンガル—バタラ・グルへと続く系譜を記す。「ジャワ年代記」の冒頭にセム語系神話の人間の始祖 Adam を置いたことは，pujangga によるイスラム優位を物語る。続く Nur はアラブ語，Cahya はサンスクリット語で，ともに「光」の意。Sanghyang は「聖なる霊」，Wening は「純粋な」，Tunggal は「唯一の」を意味

する。Batara Guru（「師の神格」）は，ヒンドゥー＝イスラムのジャワ宇宙における神々の偉大な父である。

Surâlâyâ という天国に君臨した Batara Guru には5人の子があった。Samba, Brahma, Maha Dewa, Wisnu (Vishnu), Dewi Sri（吉祥天，稲の女神）である [Meisma 版 1941: 7; Ramlan 1975: 1]。

三位一体をなすヒンドゥー教の3神と並んで，長男，長女にはジャワ固有の信仰の要素が混じっている。ジャワ島を支配していたのが四男ウィスヌ（称号 Prabu Set「セト王」）であった [Meisma 版 1941: 7; Ramlan 1975: 1]。天界・地界・人界をつなぎ，土着信仰・ヒンドゥー（仏教）・イスラムを巧みに配分しつつ，ジャワの起源が語られた。これ以降，王や王都・王国の消長が系譜の形で表現されていく。

例えば *Sajarah Bantĕn*（『Bantĕn 年代記』）では，アダムの次のスィスまでは上と同じであるが，予言者ムハンマドに至るまでに34人の予言者の名を列ね，Patimah—Usen—Jenulabidin—Jenulkubra—Jumadilkubra—Jumadilkabir—Sultan Bani Israil と続け，最後に「9聖者」のひとりで Bantĕn 王家と Cirĕbon 王家の創始者である Mahdum Gunung Jati に至る。*Sajarah Bantĕn*（または *Babad Bantĕn*）が，Gunung Jati 以降の王統を述べた年代記であることが分かる [Djajadiningrat 1913: 17]。この「年代記」では，半分（ジャワ語の表現では左の歴史〔Pangiwa〕）はヒンドゥーの神々や英雄たちや諸王を扱い，他の半分（右の歴史〔Paněngĕn〕）はイスラムの神や予言者やジャワの聖者たちとその子孫を扱う。その両方の間に位置して左右の列を結ぶのが，ジャワの聖者の血筋を有する Bantĕn もしくは Cirĕbon 王家とその子孫たち，およびこの家系と姻戚関係をもつジャワの王たちである [*ibid.*: 298]。「ジャワ年代記」の仕組みもほぼ同様であるが，作家の pujangga たちはヒンドゥー教とイスラム教の二元論よりも，南海の女神と Sunan Kalijâgâ にみられるように，固有の土着信仰とイスラムとに共感を覚えているようだ [Ricklefs 1981a: 38]。

南海の女神

「ジャワ年代記」に登場する最も重要なマタラムの「守護神」が Nyai Rârâ Kidul である。Kasekten の分野で土着の信仰の世界が提供する霊界の支配者こそ，インド洋 (Sĕgârâ Kidul) の女神なのである。現代でも，ジョクジャの王家には，筏に供物を載せてインド洋に流す儀式が伝わっている。マタラムの初代の Panĕmbahan Senâpati と結ばれ，のちにはすべてのマタラム王たちと結ばれる Nyai Rârâ Kidul は [Ricklefs 1974: 410]，本稿II-1で述べたように，パジャジャラン王国の修行僧もしくは姫の姿をとることもあった。ここではパジャジャランの姫は，後述する Baron Sakender の話にみる通り，オランダ人の祖先であるというストーリーとも関連が出てくる。

Juru Taman

セノパティに従う，皮膚の白い家来 (pânâkawan) である。「道化の従者」を意味する Pânâkawan は，影絵人形芝居（ワヤン）に登場する，主人公の仲間であり，滑稽で奇怪な姿の Sĕmar（スマル）と3人の息子ガレン，ペトルッ，バゴンを指して呼んでいる [Anderson 1965]。Juru Taman は王と同じ顔形に変える術があって，よく王の妃や妾たちを騙した [Meisma 版 1941: 113; Ramlan 1975: 81]。王の替玉・影武者であったとも考えられる。セノパティの子 Krapyak に仕えたイタリア人のことではないかとの指摘もある [Ricklefs 1974: 399, n. 72]。Baron Sakender のストーリー中では，千の島々の

王 (Prabu Ngabĕsah) の姫の侍女がマンゴーの種から産んだ双子のひとり，Kaseber（他は Suhulman）が Juru Taman だと記される。ふたりは，姫が産んだ双子に従う pånåkawan であった [*ibid.*: 399]。霊としての Juru Taman の領域は，Pasisir である [*ibid.*: 404]。

光

神の住む宇宙から放射される白い色をした球状の光こそは，天の啓示であり，王権の象徴であった。空ならば太陽と月，星の光である。マジャパヒトの最後，光は Dĕmak に飛んだ。Dĕmak の流れ星が，将来 Pajang を支配する Jåkå Tingkir の上に落ちた。Sela では老人と老婆に変身した稲光が現れた。寝ていたセノパティにも流れ星が落ちた。Wandan の女，パジャジャランの姫，南海の女神は「燃える子宮をもつ女」であり，熱い火の光を放つ女性を妻にした男が偉大な王になりえた。王のシンボルから光を発するのをみた Pugĕr 侯が王位につくようすは，次のように描写されている [Meisma 版 1941: 260; Ramlan 1975: 158]。

> ジャワ暦1627年，Mangkurat 二世が死ぬ際，皇太子の許可を得た Pugĕr 王子，Arya Mataram 王子，Arya Panular 王子が王に最後の別れを告げている時，Pugĕr 王子は，王の男性自身が屹立し，きらきら光を放っているのをみた。その光を彼が吸い込むと，陰茎は萎えて光も消えた。これこそ，皇太子がしばらく王位についたのち，死にゆく王の弟たる Pugĕr 自らが将来王になることの印であった。王の死体は清められ，Imågiri に埋葬された。

このように直截的な表現を用いてまで pujangga が訴えようとしたのは，オランダ東インド会社の支持で王位についた Pugĕr 王子 (Pakubuwånå 一世) の即位が，世襲に基づけば皇太子が次期王位を継承することからみれば「変則的」なものであったにもかかわらず，決して宇宙の秩序を破壊するものではないと強調することであった。王統の断絶をもたらしかねない「第1次継承戦」において，Pugĕr 侯の王権相続は，神の摂理にかなう宿命的で正統なものであることを表現し，合法化することが pujangga の役割であった。

聖者の墓・寺

山や丘に作られた聖者たちの墓や王家の墓や廟は「聖域」であり，ここに参拝して幸福 (bĕrkat) を祈願すれば，生活力を強め，禍を祓い，福を授けてくれる功徳があると考えられた。Wali たちが建てた Dĕmak のムスジッドに7回参詣すれば，1回のメッカ巡礼に相当するともいわれた [ストュテルヘイム 1942：54，149]。Sultan Agung は Sunan Tĕmbayat の墓に門や小屋を作ったり，Imågiri にある王家の墓を手入れしたり，Dĕmak のムスジッドをマタラム王の威信にかけて時々修復させた。墓や寺院にはサンスクリット語由来の sekti，アラブ語由来の kĕramat（呪力）が宿っているのである。Mĕrapi 山や Lawu 山など高い山にも霊の力が働く。聖者や王者の崇拝には，太古からの死者・祖先崇拝および山岳信仰とのつながりが認められる [同上書：149]。

V　バタビアのオランダ (V.O.C.)——中心の喪失

1.　大男の暗殺者——オランダ人のイメージ

Irpekhusadiman が Bĕtawi の総督のころ，Jĕpara の東インド会社 (V.O.C.) の司令官から手紙を受けとった。カルタスラの王 (Mangkurat 三世) は会社との友好を深めたいが，亡き父王が会社と結んだ約束ごとは実行しないという内容であった。総督は直ちに将校を呼び集め，王を秘密裡に殺害することを決めた。ひとりの占い師が5

万リアール（スペイン・ドル）の金でこの任に当たることになった。この者は脚の長さだけで 3.75m もある大男で，髪は縮れっ毛でぼさぼさであった。ある晩，瞬時に王宮につくと，王は庭に出ていた。ぎょっとした王は，震え声で，大男が祖父セノパティの影武者の Juru Taman かと尋ねた。男は，自分は Juru Taman ではなく，オランダの暗殺者だと名乗り，王の居場所を聞いた。王は身分を明かさず，叔父の Pangeran Pugĕr が王であると出任せをいった。いわれた通り大男が王宮前の広場に回ると，Pugĕr が小便をしているところであった。驚いた Pugĕr が男に，jin（悪霊・鬼）か syaitan（悪魔）かと尋ねると，彼はどちらでもないと答えた。男が王を殺しにきたこと，しかも自分が王だと思われていることを知った Pugĕr は，これぞ天啓だと悟った。全精神を集中し，呪文を唱え kasekten を発揮すると，大男は小さくなった。Pugĕr は男に，「来たところに戻れ。人々を苦しめるな。皆は私の民だから」と語って，男を追い返した [Meisma 版 1941: 265; Ramlan 1975: 160-161]。

この場面では，オランダ人の暗殺者は鬼の姿であった。別な場面では，pujangga たちはオランダ人の個人を，ワヤンの pånåka-wan のように面白い人間としてみながらも [Ricklefs 1974: 27]，何ごとも迅速に行動するが金目当てであり，豚肉を喰い，宴会を開けば酔うまで飲む，女好きな不信仰 (kafir) の輩だとも観察していた [Kumar 1979: 196]。だが，'Babad' の中には，次に述べる Baron Sakender のストーリーのように，オランダ人を真の騎士・英雄として描いたのもある。

2. Baron Sakender——V.O.C. の時間的な定置

Meisma 版には収められてはいないが，ジョクジャ宮廷で1821年に書かれた「ジャワ年代記」，および1812年以前に書かれたと推定できる *Sĕrat Sakondar*（大英博物館追加稿本12289号），そして *Sĕrat Surya Raja* に収録された 'Baron Sakender' の話がある。Pujangga たちの外国人観，ことにオランダ観を知るうえで大変示唆に富む。Ricklefs 教授の著書を参考にして書き出してみる。まず Batawiyah（「ありふれた煉瓦」の意，バタビアを指す [Horne 1974; Ricklefs 1974: 376]）が「南海の」島に位置することが述べられたあと，舞台はオランダに移る。

Nakoda（「船長」）なる者には11人の妻があり，オランダ名をもつ11人の息子が生まれた。ひとりの妻 (Sang Rĕtna, Ngabĕ-sah[15] 王の娘）だけは子を産まず，貝殻を産み落とした。貝殻から双子が生まれ，兄を Raden Baron Sukmul，弟を Raden Baron Kasender と呼んだ。オランダにいる Nakoda にはこのことは知らされなかった。[16]

西部ジャワのイスラム諸国の継承者，ジャカルタの王子 (Pangeran Jakĕrta) がパジャジャランを征服した際，姫たちのひとりが山に逃げ，その地の修行僧 (ajar) Sukarsi の妻となった。月満ちて美しい娘を産んだが，王子に奪われてしまった。彼が娘と寝ようとすると，子宮から焔が生じた。このため娘はある島に流された。次に，Cirĕbon の Sultan とマタラムの Sultan が娘を連れ出したが，焔の熱でともに寝る

15) Ngabĕsah または Abĕsah は，Pigeaud によればアラブ語 al-habasha に由来し，アビシニア（エチオピア）を意味するという [Ricklefs 1974: 388, n. 50]。

16) Kasender または Sakender あるいは Sakondar は，Iskandar，つまりアレクサンダー大王のことであり，*Sĕjarah Mĕlayu* ではマラッカ王国の始祖である。

ことはできなかった。後者が娘を再び島に閉じ込めたため，娘は孤独な悲しい年月を過ごすことになった。3年後，ジャカルタの王子は彼女をオランダ人に売った。

オランダ人から，3台の大砲と引換えに娘を買ったのが，Sukmul であった。1台目は「Guntur Gĕni」といいマタラムに，2台目の「Ki Pamuk」は Bantĕn に，3台目の「Nyai Sĕtomi」は Cirĕbon に渡り，各王家の家宝となった。Sukmul は娘をスペインにある家に連れ帰った。やがて娘は息子 Mur Jangkung[17] を産んだ。Jangkung が成長し名高い勇士となった時，母親に自分の出生を尋ねた。母親は，自分はスペイン生まれではなく，パジャジャランの姫であり，その地はイスラム教徒たちに破壊されてしまったと，マレー語で話した。話を聞いた彼は，ジャカルタの王子に復讐しにいくと告げた。彼は15隻の船に武器のほか，ビール，ワイン，パン，酒を積み込んでジャワに出航した。ジャワについた彼は，ジャカルタの王子やオランダ人たちの歓迎を受けた。彼らは互いにマレー語を話す仲間であった。だが，彼が備えていた大砲の演習で砲弾がジャカルタの王宮に落ちた時，王子の怒りを買い，ジャカルタを去るように命じられた。Jangkung は，自分の過失を詫び，商売上の損失を被るからこの地を離れる意思のないことを表明した。大砲を有するオランダ人たちから離れ，神の意思に従って Gunung Sari に移ったのは，王子の方であった。Jangkung は喜び，Kuta Tai[18] と呼ぶ要塞を築いて復讐に備えた。オランダ側は王子を攻撃した。王子の弟で超能力のある Purbaya 王子がジャカルタの人々を率いた。Jangkung は勝利を収めることができなかった。スペインの Baron Sukmul は，息子の Jangkung が苦境にあると聞き，Bĕtawi に乗り込んだ。父親の策は，大砲に弾丸の代りに硬貨を装塡し，Gunung Sari にむけて撃つというものだった。計略通り，金を拾おうと先を争って出てきたジャカルタの人々の頭上に，本物の弾丸が降り注いだ。恐れをなした王子は，ジャカルタ南方の山中に移り住んだ。Gunung Sari はオランダ人に奪われた。いまや山中にこもって超自然力をもつ霊たちと耐乏生活を送る羽目になった王子は，自分のこれまでを振り返ってみた。自らの土地さえオランダ人に譲り渡し，単なる叛徒になり下がった自分の誤ちにやっと気づいた。己が Sukarsi の娘をオランダ人に売り飛ばした罪にである。Sultan Agung 以来の不運に見舞われたいま，やがて自分は死ぬだろう。バタビアのオランダ人の数は増え，彼らは堀で囲んだ町を造るなど，着々とその目論見を実行に移している……[Ricklefs 1974 : 382-413] (Sukmul の弟の Kasender〔Sakender〕はイスラム教的な Ngabĕsah の国と，キリスト教的なオランダとスペインの国との両方にまたがる子孫であり，Kumpĕni〔V.O.C.〕の設立に関わったが，最後には王位につかず，マタラム王セノパティの家来として仕えたのち，突然物語から消えてしまう [*ibid.*: 385-408])。

ジャワ人とオランダ人の関係は，テクストごとに微妙な相違がみられる。*Sĕrat Surya Raja* では，Tanah Sabrang (外国) の王とジャワ王とは兄弟のような間がらである。ジャワ人はイスラム教徒であるが，外国人の宗教は定かではなく，最後に和解として外国人がイスラムに改宗する。*Sĕrat Sakondar* では，

17) Jangkung (ジャンクン) は，1619年にバタビアを建設した第4代総督ヤン・ピーテルスズン・クーン (Jan Pieterszoen Coen) を指す。

18) ホランディア城を指す [Ricklefs 1974 : 401, n. 83]。

上述のごとく，Sukmul のオランダ側とジャカルタの王子との衝突で話がおわっているが，内容から明らかになるのは，王子が正統な家系の出でないのに対し [Schrieke 1957: 281]，パジャジャランの姫と結婚した Sukmul とオランダ人はパジャジャランの正統な継承者であることだ。つまり，Bětawi もしくはジャカルタを根拠地とするオランダが，パジャジャランあるいはプリアンガンを含むジャワ西部（スンダ地方）の宗主であることを認めているのである。この書ではジャワ人たちの宗教は強調されていないが，Sukmul と Kasender は両親から，キリスト教の寄せ集めと，イスラム教の血筋を引いている。そして，Jangkung ことヤン・クーン総督に代表される東インド会社 (V.O.C.) が，ジャワ島と外国とを結びつけているのである。

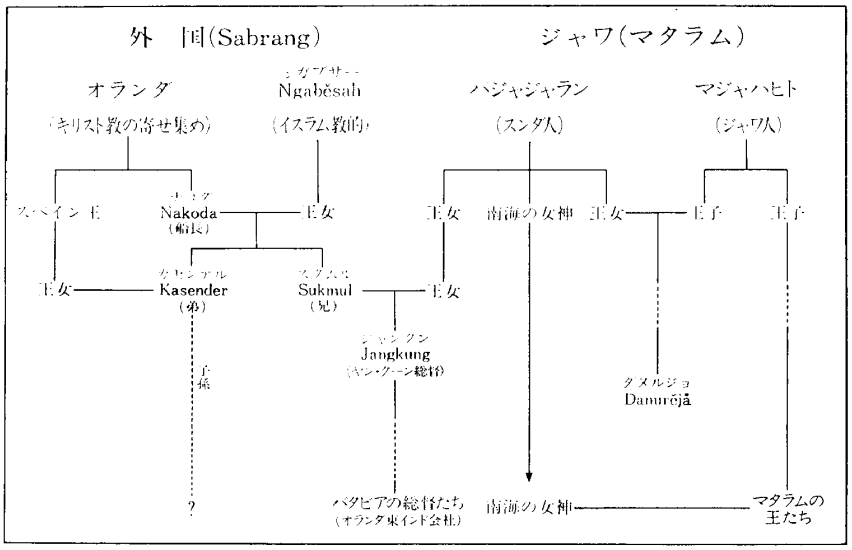

図1　「年代記」におけるジャワとオランダの神秘的な結びつき

ジャワとオランダの関係を以上の物語に沿って図示すると，図1のようになるだろう [Ricklefs 1974: 410]。

おわりに

Trunåjåyå（トゥルノジョヨ）の乱（1674-1679），Suråpati（スロパティ）の乱（1686-1703）ののち，オランダ東インド会社が3度にわたるマタラム朝の王位継承の争い（第1次〔1704-1708〕，第2次〔1717-1723〕，第3次〔1749-1755〕）に乗じて干渉した結果，2世紀近く続いた王国が分裂した。

都をカルタスラからスラカルタに移した Pakubuwånå 二世が，1743年 Baron van Imhoff 総督と結んだ条約で Pasisir 領をすべて会社の直轄領として譲り渡して以降，マタラムはオランダの属国になり下がった。1749年，会社は二世の死後，王子を Pakubuwånå 三世（称号 Susuhunan）として即位させた。55年，「ギヤンティの和約」によって会社は二世の弟の Mangkubumi を Amangkubuwånå 一世（称号 Sultan）として即位させ，ジョクジャカルタに都を開かせ，マタラム王国の半分を統治させた。57年，「サラティガの和約」を結んだ会社は，Mangkubumi の甥の Mas Said に，三世の領土の一部を割譲し，Mangkunegårå 侯 (Pangeran) を名乗らせた。1813年，ジョクジャの Sultan 家から Pakualam 侯 (Pangeran) が出て，Sultan 領の一部を領した。

オランダが確固たる植民地支配を築き上げていく18世紀，Pakubuwånå 二世の治世 (1720-1749) に近世ジャワ語文学が芽吹いた。ジョクジャの *Babad Kraton* が書かれたのは，Amangkubuwånå 一世の治世（1755-1792）であり，ソロの『大 Babad』が完成

したのは，Pakubuwånå 七世の治世（1830-1858）のことであった。

マタラム王国が寸断され，ほぼその息の根を止められた時に，宮廷芸術が栄えた理由は何であろうか。打ち続く内紛と戦乱の中で，数々の貴重なものを失ったジャワ貴族たちは，権力に対する誇りも大きく傷つけられた。外圧によって物理的・肉体的に狭い領域に封じ込められるという，時代的・空間的な閉塞状況，すなわち鎖国状態の中に自らを置いたのである。かつては世界の中心であったマタラムが，バタビアを中心とする粗野で無信仰の輩によって包摂されてしまった。とすれば，過去の栄光をとり戻して，世の中心となる手段は，文芸の中にしか残されていない。植民地権力の政治的・経済的な統制による分裂王国の相対的な安定の中で，道徳的な頽廃と堕落を目の前にして，この状況から心理的な脱却をはかることを模索する者もあったのであろう [Kartomi 1973：28]。一方，pujangga たちによる古典文学の近世ジャワ語への翻訳と，各地に伝わる説話を収集して王朝物語に仕立てるという年代記類の創作には，紙の製造も大きな貢献をしているはずだ [Ricklefs 1976：343]。自らが文化の中心ですらなくなるという危機意識と，文化上の代償行動が，のちの「文芸復興」を産み出した原動力であると思われる [Ricklefs 1974：188]。

荒唐無稽ともみえる「年代記」には，隠喩もしくは隠された情報 (pralambang, pasemon) の形でしか意図を伝えられなかった pujangga たちの屈折した心理と，このような状況の中だからこそ，時間的・空間的に浮遊する神話的な物語の世界に心のよりどころを見出し，王国の再統一を願う宮廷人たちの心情が隠されている。こう考えるなら，言霊信仰に裏打ちされ，各王家の家宝として代々伝えられたジャワの「年代記」は，王朝の伝統的世界観（中近世ジャワ人の歴史哲学）を探るうえで豊富な知識を提供する情報源なのである。

主要参考・引用文献

Anderson, Benedict R. O. G. 1965. *Mythology and the Tolerance of the Javanese.* Ithaca: Cornell University. (Monograph)

Babad Tanah Djawi in Proza Javaansche Geschiedenis. 1941. Translated by W. L. Olthof. 's-Gravenhage: M. Nijhoff.

Babad Tanah Djawi——Poenika Serat Babad Tanah Djawi Wiwit Saking Nabi Adam Doemoegi Ing Taoen 1647. 1941. Transcribed by W. L. Olthof. 's-Gravenhage: M. Nijhoff.（本文中では Meisma 版と表記する）

Babad Tanah Jawa. 1975. Translated by M. Ramlan. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa Dan Pustaka. （本文中ではRamlan と表記する）

Berg, C. C. 1965. The Javanese Picture of the Past. In *An Introduction to Indonesian Historiography*, edited by Soedjatmoko *et al.* Ithaca: Cornell Univ. Press.

Djajadiningrat, Hoesein. 1913. *Critische Beschouwing van de Sadjarah Banten.* Haarlem: Joh. Enschede en Zonen.

Geertz, Clifford. 1964. *The Religion of Java.* New York: The Free Press of Glencoe.

——————. 1968. *Islam Observed.* Chicago: The Univ. of Chicago Press.

Graaf, H. J. 1965. Later Javanese Sources and Historiography. In *An Introduction to Indonesian Historiography*, edited by Soedjatmoko *et al.* Ithaca: Cornell Univ. Press.

Graaf, H. J.; and Pigeaud, Th. 1974. De Eerste Moslimse Vorstendommen op Java. In *Verhandelingen 69.* 's-Gravenhage: M. Nijhoff.

Horne, E. C. 1974. *Javanese-English Dictionary.* New Haven; London: Yale Univ. Press.

Johns, A. H. 1961. Sufism as a Category in Indonesian Literature and History. *Journal of Southeast Asian History* 2(2).

Kartomi, M. J. 1973. *Matjapat Songs in Central and West Java.* Canberra: A. N. U. Press.

Knappert, Jan. 1977. *Myths and Legends of Indonesia.* Kuala Lumpur; Singapore: Heinemann Educational Books (Asia).

Kumar, Ann. 1979. Javanese Historiography in and of the 'Colonial Period': A Case Study. In *Perceptions of the Past in Southeast Asia,*

edited by Anthony Reid and David Marr. Singapore: Heinemann Educational Books (Asia).

Moertono, Soemarsaid. 1968. *State and Statecraft in Old Java*. Ithaca: Cornell Univ. (Monograph)

Pararaton. 1965. Translated by Hardjowardojo. Jakarta: Bhratara.

Pigeaud, Th. G. Th. 1960–1963. *Java in the Fourteenth Century*. 5 Vols. The Hague: M. Nijhoff.

———. 1967–1970. *Literature of Java*. 3 Vols. The Hague; Leiden: M. Nijhoff.

Pigeaud, Th.; and Graaf, H. J. de. 1976. Islamic States in Java 1500–1700. In *Verhandelingen 70*. The Hague: M. Nijhoff.

Prabandaru. 1975. *Jaka Tingkir dan Senapati*. Jakarta: Pustaka Jaya.

Primbon Almanak 1910–2011. 1979. Semarang: Sekretariat Empeh Wong Kam Fu.

Ricklefs, M. C. 1972. A Consideration of Three Versions of the Babad Tanah Djawi. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 35 (Part 2). London.

———. 1974. *Jogjakarta under Sultan Mangkubumi 1749–1792*. London.

———. 1976. Javanese Sources in the Writing of Modern Javanese History. In *Southeast Asian History and Historiography*. Cornell Univ. Press.

———. 1981a. *A History of Modern Indonesia*. London: Macmillan.

———. 1981b. The Javanese in the Eighteenth and Nineteenth Centuries. In *A History of South-East Asia*, edited by D. G. E. Hall. Fourth Edition. London: Macmillan Press.

Salam, Solichin. 1963. *Sekitar Wali Sanga*. Tjetakan Kedua. Jakarta: Penerbit "Menara" Kudus.

Schrieke, B. 1957. *Indonesian Sociological Studies*. Part Two. The Hague; Bandung: W. van Hoeve.

Soekmono, R. 1973. *Pengantar Sejarah Kebudayaan Indonesia*. Jilid Ketiga. Jakarta: Yayasan Kanisius.

Sri Jacat. 1975. Aji Saka——Ancient Chronological Systems in Indonesia. *The Indonesia Times*. Feb. 25, 1975.

Sriwibawa, Sugiarta. 1976. *Babad Tanah Jawa*. Jilid 1–2. Jakarta: Pustaka Jaya.

Supomo, S. 1979. The Image of Majapahit in Later Javanese and Indonesian Writing. In *Perceptions of the Past in Southeast Asia*, edited by Anthony Reid and David Marr. Singapore: Heinemann Educational Books (Asia).

Uka Tjandrasasmita, ed. 1977. *Sejarah Nasional Indonesia III*. Jakarta: Balai Pustaka.

カッシーラー，エルンスト．1972．『言語と神話』岡　三郎；岡　富美子(訳)．国文社．(原著 Cassirer, Ernst. 1925. *Sprache und Mythos*. Leipzig: B.G. Teubner.)

エリアーデ，M. 1971.『イメージとシンボル』前田耕作(訳)．せりか書房．(原著 Eliade, Mircea. 1952. *Images et Symboles——Essais sur le Symbolisme Magico-religieux*. Paris: Gallimard.)

生田　滋．1974.「東南アジアの建国神話」『日本神話の比較研究』法政大学出版局．

———．1976.「ジャワの歴史書と古事記」『言語』大修館．

———．1977 a．「古代ジャワの歴史記述について」『古代日本文化の探求——古事記』社会思想社．

———．1977 b．「地の涯の王国」『アジアと日本人』研究社．

カーメンスキイ，C. 1980.『神話学入門』菅原邦城；坂内徳明(訳)．東京大学出版会．(原著 СТЕБЛИН-КАМЕНСКИЙ, М.И. 1976. *МИФ*. Ленинград: Издательство Наука.)

リー・クーン・チョイ．1979.『インドネシアの民俗』伊藤雄沢(訳)．サイマル出版会．(原著 Lee Khoon Choy. 1977. *Indonesia between Myth and Reality*. Singapore: Federal Publications.)

馬淵東一．1976.『馬淵東一著作集』第3巻．社会思想社．

真木悠介．1981.『時間の比較社会学』岩波書店．

永積　昭．1977.『アジアの多島海』(世界の歴史13) 講談社．

フィリップソン，P. 1979.『ギリシャ神話の時間論』広川洋一；川村宣元(訳)．東海大学出版会．(原著 Philippson, Paula. 1944. *Untersuchungen über den Griechischen Mythos*. Zürich.)

ストュテルヘイム．1942.『回教と蘭印群島』高村東介(訳)．生活社．(原著 Stutterheim, W.F. 1935. *De Islam en Zijn Komst op den Archipel. Leerboek der Indische Cultuurgeschiedenis*. Vol. 3.)

土屋健治．1982.『インドネシア民族主義研究』創文社．